

## トキ節を用いた複文におけるテンス表現の歴史的変遷 —中古から中世末期資料の比較を通して—

すえよし ゆうき  
末吉 勇貴（兵庫県立網干高等学校）

### 1 はじめに

本発表は複文におけるテンス選択の歴史的変化をトキ節が用いられた複文を対象にして明らかにするものである。現代語のトキ節を用いた複文（以下、トキ節複文）では、(1)のように、未来の事態を表す際に過去形を用いることができる。それに対して古典語のトキ節複文では(2)のように過去形を用いず、ム形助動詞を用いるというルールの違いがある。

- (1) 明日、学校へ行った時、図書館に寄る。（現代語の作例）  
 (2) 「今は限りありて、絶えむと思はむ時に、さる事は言へ」【絶交しようと思った時に、そういう事は言え】（枕草子）

これは、現代語のトキ節複文が主節時を基準としてトキ節のテンスを決定する体系（相対テンス）を持っており、古典語は発話時を基準としてトキ節のテンスを決定する体系（絶対テンス）を持っているためであるが、その体系間の推移のプロセスは明らかになっていない。そこで本発表では「絶対テンスの体系がいつ相対テンスの体系に変化したのか」という問題を設定し、追究していきたい。

### 2 研究の枠組み

#### 2.1 絶対テンスと相対テンス

相対テンスとは主節の発話時を基準として従属節の出来事を述べたものである。それに対して、絶対テンスとは発話時を基準として従属節の出来事を述べたものである。なお、絶対テンスはあくまで発話時からの時間関係を示すものであるため、相対テンスのように事態の順序は問われない。

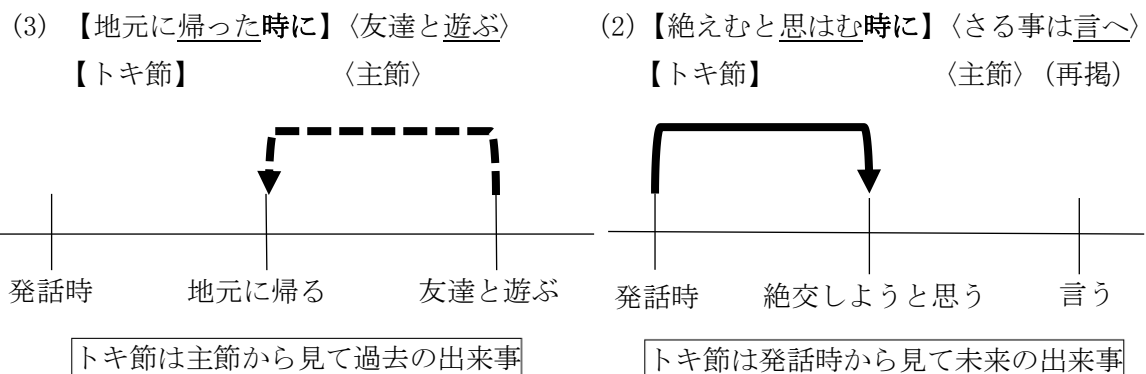


図 1 相対テンスの考え方

図 2 絶対テンスの考え方

トキ節複文のテンス体系について、現代語では絶対テンスのような事態順で解釈ができ

ないため、相対テンスの体系を持っているということが分かる。

(4) 中国に行った時、地図を買う。〈\*絶対テンス：中国に行く→発話時→地図を買う〉〈相対テンス：発話時→中国に行く→地図を買う〉

(5) 中国に行く時、地図を買った。〈\*絶対テンス：地図を買う→発話時→中国に行く〉〈相対テンス：地図を買う→中国に行く→発話時〉

一方、古典語では(2)のような用例が存在することから、井島（2011）が現代語と上代、中古語を比較してトキ節複文に現れる「時の助動詞」とその表す時間的前後関係が共通しているかを調査し、相対テンスは上代や中古には見られないということを明らかにしている。さらに、黒木（2007）では、(6)の助動詞群（承接順位が最も低く、大半の助動詞に後接する「最下位助動詞」）は中古のトキ節と母胎節<sup>1</sup>において9割程度同じ助動詞が選択されることを示し、やはり中古においてトキ節複文はほとんど義務的に絶対テンスが守られていることを示している。

(6) 現在「ラム」「φ」 過去「キ」「ケリ」「ケム」 未来「ム」「ジ」 反事実「マシ」  
（黒木 2007 の最下位助動詞）

## 2.2 絶対テンスから相対テンスへの変化モデルと論証の手立て

以上を踏まえると古典語と現代語のトキ節複文のテンスの組み合わせは表 1 のようになる。なお、「ケリ」などの表 1 中以外の過去、未来標示も存在するがここでは省略している。

表 1 上段の古典語の体系が下段の現代語の体系に変化するためには①従属節と母胎節の間で異なるテンス選択が許容されること②従属節と母胎節が同じテンスであっても事態の順序はトキ節が非過去の場合 A→B、トキ節が過去の場合 B→A が使用されなくなることの 2 点が必要な条件となる。①については、古典語のテンスが一致していないトキ節複文の事態の順序を考えることで解決する。また、②につ

いては、古典語のテンスが一致しているトキ節複文の事態の順序を考えることで解決する。つまり、現代語において不適格となる事態の順序の用例が消えた時代にテンス体系の変化が起こったと考えられる。

表 1 トキ節複文におけるテンスの組み合わせ

	A トキ節	B 母胎節	事態の順序
絶対テンス	キ（過去）	キ（過去）	A→B、B→A
	基本形	基本形	
	ム（未来）	ム（未来）	
相対テンス	基本形	基本形	B→A
	基本形	タ（過去）	*A→B
	タ（過去）	基本形	A→B
	タ（過去）	タ（過去）	*B→A

<sup>1</sup> 母胎節とは副詞節（本発表ではトキ節）の係り先を指す。主節が文末の節で固定され、主節自身は副詞節とならないのに対し、母胎節は単に「ある副詞節の係り先」であるため、母胎節も副詞節になり得る。

## 2.3 調査方法

まず、本発表で使用した資料を以下に示す<sup>2</sup>。

中古：竹取物語、伊勢物語、大和物語、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、  
和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記  
中世前期：今昔物語集、建礼門院右京大夫集、東関紀行、とはずがたり、平家物語  
中世後期：天草版伊曾保物語、天草版平家物語、虎明本狂言集

この調査資料の中から得られた全例より、複文を目視で抜き出す。次に、状態述語が用いられる場合は相対テンス的な解釈が生まれづらいため、複文の中からトキ節と母胎節の述語タイプを状態述語か動作述語（非状態述語）に分類し、状態述語を含む例を除外する。「状態」には以下の（a）～（e）のうちいずれかに該当するものを振り分け、「動作」には状態動詞以外の動詞を分類している。

（a）形容詞、形容動詞／（b）リ、タリ形／（c）存在動詞、存在の意味があるとみなせる動詞<sup>3</sup>／（d）否定形／（e）知覚動詞「聞こゆ」「見ゆ」「思ゆ」（石垣 1955）

そして、トキ節も母胎節も「動作」と認定された例のトキ節と母胎節のテンスを表<sup>24</sup>に従って「現在形」、「過去形」、「未来形」に分類する。これらは相互に承接せず、これらの形に下接するものも存在しない（黒木 2007）。また、動詞の命令形は助動詞ではないが、命令は未来の出来事を指すため、未来テンス相当とした。

その後、トキ節と母胎節でテンスが一致している複文とテンスが一致していない複文の事態の順序を文意から考え、いつから相対テンスが体系的に現れるかを探る。

表2 テンスの判断に用いる形

時代\形	過去形	現在形	未来形
中古	キ	基本形	ム
中世前期	ケリ、ケム	ラム	命令形
中世後期	タ	基本形	ウ、ウズ、命令形

## 3 中古、中世前期のトキ節複文

以下の表3に中古、中世前期で行った調査の結果をまとめて示す。

<sup>2</sup>底本は各コーパスに従う。なお、『平家物語』のみ『日本古典文学大系』（岩波書店）、それ以外は『日本語歴史コーパス』を使用した。（『日本語歴史コーパス』検索キー＝前方共起条件：キーから1語が動詞、助動詞 キー：語彙素読み「トキ」 『日本古典文学大系本文データベース』検索キー＝「時」）

<sup>3</sup>まだ春宮の御息所と申しける時【まだ春宮の御息所でいらっしゃった時】（伊勢物語）など

<sup>4</sup>中古、中世前期のテンスは黒木（2007）を、中世後期のテンスは福嶋（2011）を参考にした。

表3 中古、中世前期におけるトキ節複文のテンスと事態の順序

事態の順序\テンス		時制一致			時制不一致		計	総計
		過去形	現在形	未来形	現在×過去	過去×現在		
中古	トキ節先行	18	12	7	2	1	40	67
	トキ節先行（未来）	0	0	0	0	0	0	
	母胎節先行	3	0	0	0	0	3	
	順序なし	2	18	0	4	0	24	
中世前期	トキ節先行	66	96	25	16	16	219	313
	トキ節先行（未来）	0	0	0	0	0	0	
	母胎節先行	5	0	3	0	0	8	
	先行不明	9	0	1	1	0	11	
	順序なし	6	39	3	27	0	75	

相対テンスでは、トキ節が過去形の場合はトキ節の事態が先行し、トキ節が現在形の場合は母胎節の事態が先行する。表3では相対テンスの場合に現れるテンスのパターンに網掛けを付している<sup>5</sup>。中古では、黒木（2007）と一部調査対象が異なっているが、テンスがトキ節と母胎節で一致している用例は67例中60例（約90%）見られる。一方、中世前期では313例中253例（約81%）と、少し一致率が下がっている。以下に代表的な例を挙げる。

- (7) 「なかおほせごともたまはぬ」と奏したまふ時に、帝「いはで思ふぞいふにまされる」とのたまひけり。【「なぜ何もおっしゃらないのですか」と申すと、帝は「口に出さず心で思う方が辛い」と仰った。】（大和物語 トキ：現在形 母胎：過去形 トキ節先行）
- (8) 買臣、古里の会稽の守になりて赴く時、かの妻、国の民の妻となりて買臣に見えにけるを、【買臣は故郷の会稽の太守となって赴く時、あの妻はその国の人の妻となっていてそこで買臣と再会したのだが】（十訓抄 トキ：現在形 母胎節：過去形 トキ節先行）
- (9) 涙を流して礼拝し奉る時に、仏眉間より光を放ち給ふ。【涙を流して礼拝すると、仏像は眉間から光を放たれる。】（今昔物語集 トキ：現在形 母胎：現在形 トキ節先行）
- (10) 唐土にわたりて、帰り来ける時に、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。【唐に渡って、帰国する時に別れを惜しんであちらの漢詩などを作った。】（土佐日記 トキ：過去形 母胎：過去形 母胎節先行）

(7)はテンスの組み合わせ上、相対テンスに思えるが、相対テンスであれば〈母胎節→トキ節〉の順で事態が発生することになる。しかし、〈帝が仰る→帝に申す〉の事態の順序ではこの文は成立しないため、絶対テンスだと判断できる。(8)も同様に〈会稽に赴く→会稽で前妻に会う〉の順でのみ文が成立するため絶対テンスである。また、テンスが一致している(9)は、相対テンス的解釈では〈仏が光を放つ→礼拝する〉という順序になり、文意が通じないため、これも絶対テンスだと判断できる。(10)についても、〈唐から帰る→漢詩を作る〉とは解釈できないため、両節の過去形は発話時と対応していると考えられる。

<sup>5</sup> トキ節も母胎節も過去形を採用している複文は事態の順序が相対テンスのものと同一になりやすい。ここでは18例見られるが、これは相対テンス的解釈が可能であるということには直接結びつかない。

先行研究の通り、中古においては相対テンス的解釈ができる例は存在しなかった。また、中世前期も中古と大きく変化していないため、絶対テンスの体系を保っていると言える。

#### 4 中世後期のトキ節複文

以下の表 4 に中世後期で行った調査の結果をまとめて示す。

表 4 中世後期におけるトキ節複文のテンスと事態の順序

事態の順序\テンス		時制一致			時制不一致			計	総計
		過去	現在	未来	現在×過去	過去×現在	過去×未来		
キリシタン	トキ節先行	11	5	3	1	4	0	24	39
	トキ節先行（未来）	0	0	0	0	0	0	0	
	母胎節先行	0	0	0	0	0	0	0	
	先行不明	3	1	0	0	0	0	4	
	順序なし	2	6	3	0	0	0	11	
狂言台本	トキ節先行	1	0	0	0	1	0	2	23
	トキ節先行（未来）	0	0	0	0	0	1	1	
	母胎節先行	0	2	0	0	0	0	2	
	先行不明	0	0	0	0	3	0	3	
	順序なし	0	9	0	4	2	0	15	

表 4 で網掛けを付した箇所の基準は表 3 と同様である。テンスの一致率は、キリシタン資料が 39 例中 34 例（約 87%）と中世前期よりも高くなった。一方で、虎明本狂言では 23 例中 12 例（約 52%）とこれまで見てきた資料の中で最も低い。以下に代表的な例を挙げる。

(11) さて、犬共ようやく見知ったと思ふ時、密かに忍び入らうとすれば（天草版伊曾保物語 トキ：現在形 母胎節 現在：トキ節先行）

(12) 野牛の母、草を食らいに野に出づる時、子供に言い置く様は（天草版伊曾保物語 トキ：現在形 母胎：現在形 先行不明）

(13) （三つなりの柑子について）大事の事じやとぞんじて、ふところへいるる時に、一つほぞがぬけて、ころころとこけて行く程に、（大蔵虎明本狂言 こうじ トキ：現在形 母胎：現在形 母胎節先行）

(14) （酒売りが顧客に話す場面）ようできた時、かさねて御そう申さう程に、（大蔵虎明本狂言集 かわらたろう トキ：過去形 母胎：未来形 トキ節先行（未来））

(11) は中古、中世前期同様に相対テンス的解釈では〈忍び込もうとする→犬が自分を見知ったと思う〉という順序になるため不適当である。一方、(12) は相対テンス的に〈言い置く→野に出る〉と解釈することも、絶対テンス的に〈野に（一歩でも）出る→言い置く〉と解釈することも可能である。キリシタン資料ではまだ一部でしかこのような用例は見られないが、(12) のような中古、中世前期とは異なる用例が現れることが指摘できる。次に(13) については、〈懐へ入れる→転げて行く〉では事態が成立しないため、〈転げて行く→懐へ入れる〉という事態の順序のみ適当となる。(13) はテンスが現在形で一致する複文において母胎節が先行する初の確例である。最後に(14) は、トキ節の事態が先行する例だが、未来の出来事について過去テンスが用いられている。絶対テンス的に〈酒ができる→発話時→お知らせ

せする」という解釈は不可能なため、〈発話時→酒ができる→お知らせする〉という相対テンズの解釈でのみ文意が通る。このように虎明本狂言では、相対テンズの出来事順でのみ解釈できる確例が初めて見られる。また、これまで多く現れていたトキ節の事態が先行するパターンが少ないということも指摘できる。

このように絶対テンズの相対テンズ化がこの時期に導かれた背景には、古典語の「タリ」が「タ」としてテンズ化したことが条件になったと考えられる。そしてその動機には、阪倉（1975）が示した古典語の「開いた構造」が、近代になるにつれて「閉じた構造」へ変遷していくという構文上の事情があるだろう。つまり、節同士の自立性が高かった古典語が、次第に文としてのまとまりを求められ、従属節の従属度が高まったと言える。また、同時期には矢島（2013）が明らかにしたように、条件表現も並行的な事象として捉えられる。

## 5 まとめ

本発表で指摘したことは以下の通りである。中古、中世前期では相対テンズの解釈が可能な例は見られなかった。中世末期のキリシタン資料で初めて母胎節先行でも解釈できる用例が現れたが、全体の中ではごく一部で、依然として絶対テンズ的な解釈でしか説明ができない例が多数を占めていた。虎明本狂言集では逆にトキ節が先行する例が見られなくなり、出来事の順序が確定できる全ての例が相対テンズ的な解釈でしか説明できない例であった。また、過去形が未来に使われるという相対テンズでしか解釈ができない例も、初めて虎明本狂言集で見られた。

これらを踏まえて、冒頭で設定した「絶対テンズの体系がいつ相対テンズの体系に変化したのか」という問いに対して答えを出すとすれば、「絶対テンズの体系は中世末期を境に相対テンズの体系へと変化していった」と結論付けられる。

## 参考文献

- 石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店  
井島正博（2011）『中古語過去・完了表現の研究』ひつじ書房  
黒木邦彦（2007）「中古日本語のトキ節に見られる文法的特徴」『語文』88, pp. 45-53, 大阪大学国語国文学会  
阪倉篤義（1975）『文章と表現』角川書店  
福嶋健伸（2011）「中世末期日本語の～ウ・～ウズ（ル）と動詞基本形——～テイルを含めた体系的視点からの考察——」『國語と國文學』80-3, pp. 44-64, 京都大学文学部国語学国文学研究室  
矢島正浩（2013）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院

## 使用したデータベース

- 国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>（2021年1月13日確認）  
日本古典文学大系本文データベース <http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>（2020年9月20日確認）